

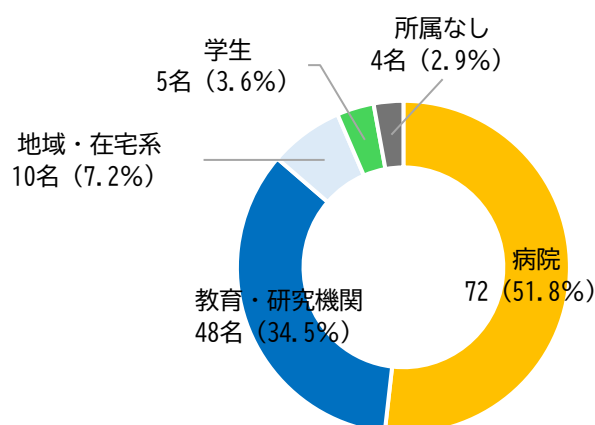
## 日本老年看護学会 30 周年記念シンポジウム <アンケート結果>

### ◆ アンケート集計結果

実施期間：2025 年 11 月 24 日（土）～ 11 月 30 日（日）

回答数：139 名

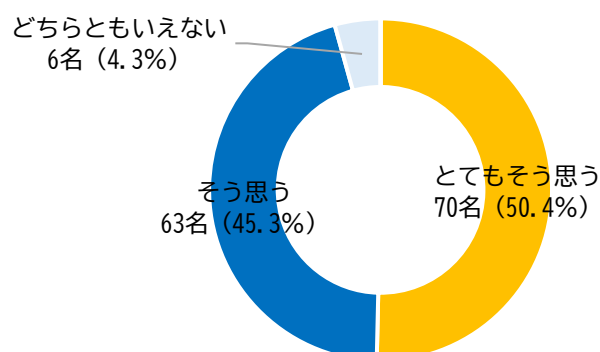
#### 1. 回答者の属性



- \* 病院 72 名（51.8%）、教育・研究機関 48 名（34.5%）で、病院の割合が最も高かった。
- \* 日本老年看護学会の会員 126 名（90.6%）、非会員 13 名（9.4%）であった。

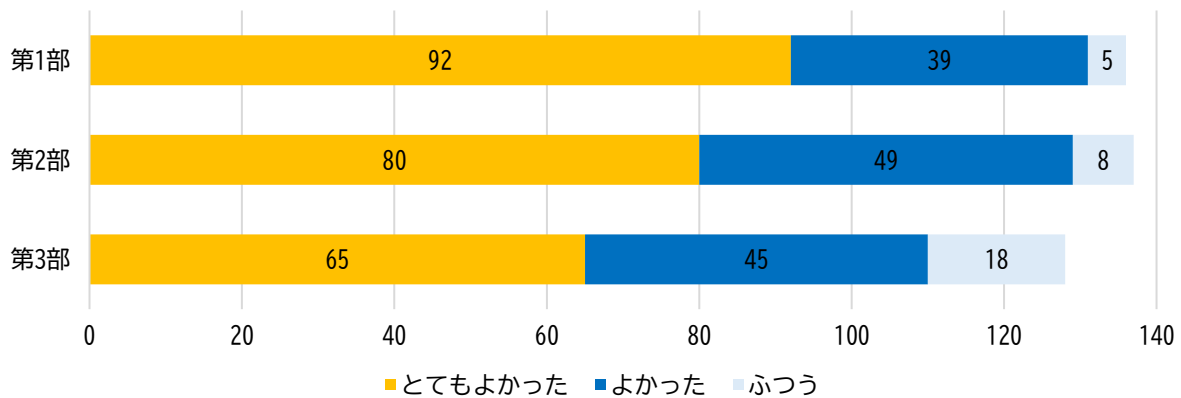
#### 2. シンポジウムの内容

##### ◇ 本シンポジウム全体の内容は期待に沿うものでしたか？



- \* シンポジウム全体が期待に内容であったかについては、「とてもそう思う」70 名（50.4%）、「そう思う」63 名（45.3%）で 9 割以上が期待にその内容であったという回答であった。「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した人はいなかった。

##### ◇ 本シンポジウムのプログラム全体（第 1 部～第 3 部）の内容はどうでしたか？ （参加できたプログラムのみ回答）

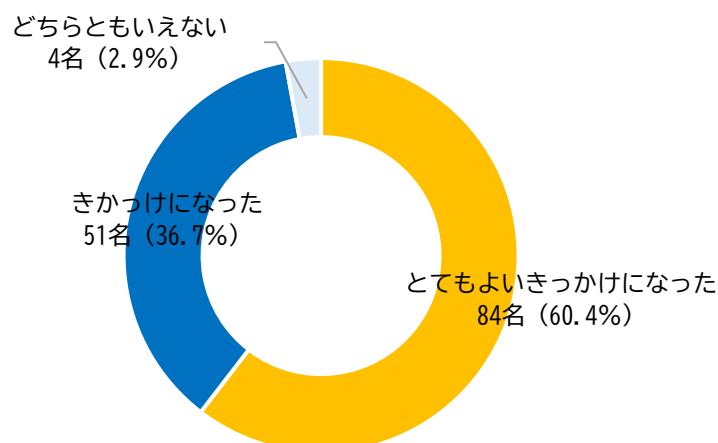


- \* 回答数は、第1部：136、第2部：135、第3部：128であった。
- \* 第1部～第3部まで8割以上が「とてもよかった」「よかった」と回答していた。
- \* 第1部が「とてもよかった」92名（67.6%）、「よかった」39名（28.7%）で最も満足度が高かった。

#### 【各登壇者に対する質問】

第1部	湯浅美千代 氏	なし
	北川公子 氏	なし
第2部	齋藤多恵子 氏	大学の急性期病院で発表にあった病院から地域と幅広く活躍されており、大変感銘を受けました。お答え頂けるかわかりませんが、勤務形態はどのようにされているのですか。地域も含め多くの役割を担われているので教えて頂きたいと思いました。
		院内デイケアはどのくらいの開催頻度で行っているのでしょうか。また、開催時のスタッフ構成や他職種の協力はどのように得られているかをご教授いただけますと幸いです。
	野澤恭代 氏	なし
	遠藤泰子 氏	2つの事例では、難しいと感じたところの紹介はあり訪問看護からの導入がされたとのことでした。訪問看護での難しいと感じたところでの介入を差し支えなければ教えて頂きたいです。病院での退院支援で、認知症の方では、まだまだ生活はできていると思い訪問介護を拒否される方がおり、わたし自身も難しさを感じています。
	守谷卓也 氏	なし
	平井正明 氏	なし

- ◇ 本シンポジウムを通して「認知症と共に生きる社会の創生」について考えるきっかけになりましたか？



- \* 「とてもよいきっかけになった」84名（60.4%）、「きっかけになった」51名（36.7%）と

回答があり、多くの参加者にとってシンポジウムが「認知症と共に生きる社会の創生」について考えるきっかけになっていた。

◇ 今後の実践や地域活動に取り入れてみたいと思った内容はありましたか？（自由記述）  
（原文のまま）

1	院内デイケア
2	取り入れるというよりは、第一部の講師の方達の発表を元に施設にとって、どんな働きが必要なのか考えていくきっかけになればと思う。
3	地域活動と連携した基礎教育
4	当院は急性期病院ですが、できる範囲で院内デイケアを実施してみたいと思いました。
5	院内デイをとりいれたいとおもいました。また、病院での入院前かファレンスができると、患者さんの混乱を最小限にすることができ、スムーズに手術に繋がれることに取り組みたいと思いました。
6	病棟スタッフから院内へ認知症に関する情報を提供、共有していきたい
7	本人主体のケア、本人と共に創る暮らしということは、今一度考えてみたいと思いました
8	行き場のない若年性認知症の方々の行き場作り
9	施設から地域につなぐ為に、地域活動への参加を、考え行動に移してみたいと思いました。
10	本人の声を聴くことの大切さ、これを実際に誠実に続けていくことの大切さ、を感じた。
11	認知症の人の声を聴くことを実現できるケアの推進
12	地域では、認知症のある方への偏見がまだまだある状況だと考えます。少しでも見方が変わるように、少しずつ研究に取り組みたいと思います。また、学生との臨地実習で認知症をもつ方を受け持たせていただく機会が多くあるため、私自身が手本となれるように、笑顔を基本にその方に合わせたコミュニケーションやもてる力を生かしたケアを実践していきたいです。
13	当事者の声を聞いて、入院時の看護でできることは何かみんなで考えたいと思いました。
14	当事者の日々の一つひとつの選択を尊重していきたいと改めて感じました。
15	急性期病院における認知症ケア、院内デイケア、家族の代わりになるような関わり
16	地域住民との連携や参加の場面を開拓していくことに取り組んでいますので、参考になりました。
17	病院看護師に地域の活動に触れる機会をもっと増やすような取り組みをしていきたいと思いました。
18	共創するという観点からは自分たちの専門としての「認知症看護」という枠にとらわれず、病院内の関係者(医療職、当事者、事務職員など)も一緒に認知症と社会について考えられる機会を持って行かなくてはならないと感じた。
19	当院は、外来患者やオレンジカフェ等で地域の方が多く利用しています。院内の案内で分かりにくい点等、一緒に歩いて聞いてみたいと思います。
20	地域での支援者の相談窓口としての GCNS と CN の会（集まり）をつくること
21	本人が主体的になれるように傾聴する
22	認知症の本人の声を聞く、笑顔で接する
23	大学教員をしております。今日学んだことを、学生にも紹介してみようと思いました。
24	認知症の人の声をよく聞くということを改めて丁寧に行っていく必要性を感じました。また、入院された認知症の人をどういう風に支援するべきか、医療の方針ばかりでなく、日常生活のこまごまとしたことを支え意思をくみ取っていく必要性、日常倫理にもとづく関わり合いを重視したいと思いました。
25	院内デイケアを定期開催できるように調整したいと思いました
26	特養での看護専門性を具体化していきたいと思いました
27	本人の声を聞く、やりたいことを聞く、そこからケアを見つける。ケアから、共に生きることへ変化していく。そういった共生を実現していきたい。 平井さんの言葉を病院の研修で伝えていきたい。
28	・ DAYS BLG の介護保険を超えた取り組み、地域での清掃、庭園への取り組みなどが広がるといいなと思いました。 ・ 認知症に自分になった時に受けた看護・介護を提供できたらいいなと思います。 少なくとも、認知症の人を傾聴する姿勢、平井さんが話されていた「その人に関心を持つ」関わりができる看護師が基本なのだと改めて思いました。
29	認知症ケアの継続、指導の実施。一般市民への講演の継続
30	地域で活躍できる場作り 院内デイ
31	院内デイを参考にしたい
32	院内デイ
33	学生が認知症の患者様と関わる際に、学生の関わり方ひとつで患者様の入院生活が良い方にも、悪い方にも変わる可能性があるということを伝えていきたいと思いました。

34	自分事としてできることをできるだけしていきたい
35	日々のケアを丁寧に行っていきながら、認知症の人の意思決定を笑顔で支えていきたいと思いました。
36	当事者からのメッセージを通じて、支援する側に何が求められているのかが、とてもよく伝わりました。この学びを今後の実践に活かしていきたいと思います
37	認知症の人、ご本人の思いを聴き、日々のケアに活かしていくこと
38	「認知症の人と医療機関の懸け橋となる看護への提言」が絵に描いた餅とならないように、現場で実践していきたいと思いました。
39	平井様のお言葉を忘れず、看護師でありたいと思いました。
40	認知症高齢者と家族の声をできるだけ取り入れたケアの実践を行い、ともに笑顔になれるような看護を創意工夫していきたいと感じた
41	デイサービスの在り方について、本人の想いを取り入れて大切にすることは、とても重要なことだと再認識することができたため、今後どういう形になるか分かりませんが取り入れてみたいと思いました。
42	生活をつなぐケア実践
43	洗車やカレー店など、メンバーがやりたいことを支援する取り組み
44	当事者の声を聞き、何ができるか、共に考え取り組んでいきたいと思いました。そして、平井さんからいただいた声を、24時間患者さんの側にいる看護師として真摯に受け止め、実践していきたいと思います。
45	本人のやりたいことをまずは確認するということが改めて大切であると実感しました。教育に反映していきたいです。
46	デイケア、会話の中から暮らしを知り、やりたいことをやれるようにすること
47	認知症の人に限らず、地域の人々誰もが集えるような場の提供が地域の人々や自治体の協力で開催できるよと思った。地域の人々が顔なじみの関係となり、お互いが支え合える環境づくりです。
48	院内デイケア その人を知り関わること